

# 岸田知子 著

## 『漢語百題』

(四六版・並製二八八頁・  
本体一八〇円＋税 大修館書店)

偶然、インターネット上に岸田知子先生の『漢語百題』のサイトを見つけたのは、七年ほど前だったろうか。真っ先に読んだのは、「諱」の項であった。簡にして要を得た説明と、豊富な実例に惹きつけられ、すぐに他の項目もプリントアウトして、何度も読み返した記憶がある。

それまでは、若い先生から「漢文を教えるための教養を身につけるには、どうしたらいいですか」と尋ねられると、「高島俊男さんの『お言葉ですが』シリーズを読むといいですよ」と助言するのが常だったが、これ以来、質問には「岸田先生の『漢語百題』で勉強しよう」と答えることが習慣となった。

その『漢語百題』が、今般書籍化された。早速目を通すと、改めて著者の学識の深さと発想の豊かさ、確かな筆力に感服させられる。一例を示そう。助字の「遂」は、



「ついに」という訓から、「とうとう」と誤って解釈されることが多い（現にある漢和辞典は、最近の改訂までこの訳を載せていた）。では、なぜ「かくて」と訳さなければならぬのか。その詳細はここでは触れないが、本書にヒントを得て、「隧道」（トンネル）の語を使って説明したところ、高校生の反応は上々であった。さらに、「わかりにくいときは「遂」を飛ばして訳すほうがいいのではないかと思う。」という著者の指摘は卓見であり、漢文を教える者に安心感を与える。

漢文の授業を行う上で、漢文を専門とする教師が現代文や古文を専門とする教師と異なる点があるとすれば、学生時代に授業や演習で、師から口伝を受けたか否かの差であろう。授業の準備に注釈書や辞典を用いるのは、どちらも共通である。ところが、

注釈書や辞典の説明は簡潔すぎて、知りたいたいの半分もわからないことがある。大学の講義では教わるが、注釈書や辞典では省かれるもの、これを先ほどは「口伝」と表現したが、これの有無が授業の幅、厚み、豊かさに影響するのではないだろうか。本書は、漢文専門ではない教師の要求にも、確実に応えてくれる。『漢語百題』を読むか読まないかで、今後の授業の質が変わってくるにちがいない。

漢字、漢語の誤用に関する歯に衣着せぬ指摘も、本書の魅力の一つである。たとえば浅田次郎氏の誤解への言及（「字」の項）や、昨今のいわゆるキラキラネームの流行に対する警鐘（「未央」の項）は、読者を胸のすく思いにさせる。漢文教師ならずとも、手にしたい一冊である。

今までネット上の情報として接してきた本書を書籍で再読して、報みややささだけでなく、理解の深さも比較にならないことに実感した。縦書き、横書きのちがいで以外にも、電子と紙の相違点は多くある。紙媒体の優位性を再認識できたのは、思わぬ副産物であった。

（塚田勝郎・筑波大学附属高等学校）